

# 帯飾板と匈奴

韓眞聖 (韓国慶熙大)

## はじめに

古代東アジア世界の一翼を担った「匈奴」はモンゴル内外の注目を集めている。そこで、本発表では、最初に 1999 年以降の最新成果を含めた韓国隊による発掘成果と匈奴研究の動向を紹介する。次にそうした研究の進展を踏まえ、発表者が研究を進めている帯飾板について論じたい。

## 1. 韓国における匈奴考古学調査・研究の現状

### (1) 韓国調査隊のモンゴル地域での匈奴遺跡調査状況

韓国調査隊のモンゴル地域での考古学調査は、1992 年の韓国・モンゴル学術調査研究協会によって初めて開始された。約 5 年間、主にモンゴル先史時代遺跡の現況把握と地表調査を行い、その過程で北タミル川一帯の匈奴時代の墓群を発見した。このような事前調査を足がかりに、1999 年に国立中央博物館はトゥヴ県(Tuv aimag)ムンゲンモリト郡(Mungunmorit soum)で初めて匈奴遺跡の発掘を開始し、匈奴土器窯と瓦窯を調査した。2000 年にはモリン・トルゴイ(Morin Tolgoi)遺跡で環状匈奴墓 1 基、2001 年にはホドギン・トルゴイ(Khudgiin tolgoi)遺跡で環状墓 4 基が調査された。2006 年からドールリグ・ナルス(Duurilig Nars)墓群で大型の「凸」字型墓(甲字型墓、基壇墓)や陪葬墓などの発掘が始まり、現在も継続している。2010 年代以降、モンゴルで匈奴の都市遺跡に関心が増え、そのような状況に合わせ、2013 年から 2016 年までゴア・ドヴ(Gua Dov)土城が調査された(国立中央博物館 2017)。2016 年からは、中央文化財研究院が組織し、複数の調査法人と大学が参加した大韓民国共同連合調査隊がチヘルティーン・ゾー(Chihertiin Zoo)遺跡とフレート・ドヴ(Khureet Dov)土城を調査し、現在に至っている。

表 1 韓国隊のモンゴル地域での匈奴遺跡発掘一覽

調査年度	遺蹟名	所在地	性格	調査遺構	主要 出土 遺物	調査擔當機關		出典
						韓国	モンゴル	
1999	ホスチン・ボラグ Khustyn Bulag	Tuv道 Mungun morit 県	生産 遺跡	土器窯址, 瓦窯址	土器片, 圓形土製品, 瓦磚類 片	国立中央 博物館	国立歴史博物館, モンゴル科学院 歴史研究所	国立中央博物館 2001
2000	モリン・トルゴイ Morin tolgoi	Tuv道 AltanBulag県	墳墓	方形1基	銅鏡, 骨箸, 土器, 白樺樹皮 加工品 など	同上	"	"
2001	ホドギン・トルゴイ Khudgiin tolgoi	Arkhangai道 Battsengel県	墳墓	圓形4基(1~4号墓)	土器, 燈臺, 馬鐙, 鐵鍬, 骨弓頭 など	同上	国立歴史博物館, モンゴル科学院 考古学研究所	国立中央博物館 2003
2006 ~ 2019 現在	ドールリグ・ナルス Duurilig Nars	Khenti 道, Bayan-adraga県	墳墓	凸字形3基(1,3,5号), 圓形1基(3号), 方形1基(4号)	土器, 燈臺, 漆器類, 銅鏡, 銀鏡, 馬具類, 馬車 など	同上	国立歴史博物館, モンゴル科学院 考古学研究所	国立中央博物館 2011
				凸字形1基(T1号墓), 陪葬墓10基(E1~3号, W1~6号, S1~1号)	土器, 棺裝飾, 銅鏡, 鐵鍬, 馬具類, 馬車付屬, 玉璧 など	同上	国立歴史博物館, モンゴル科学院 考古学研究所	国立中央博物館 2014
				160号墳の陪葬墓 6基(E1~E4号, W1~W2号), スラグ分布区域	土器, 鐵製馬具類, 釵 付屬具 など	同上	モンゴル科学院 歴史学考古学研究所, 国立歴史博物館	国立中央博物館 2021
2013 ~ 2016	ゴア・ドブ Gua Dov	Tuv道 Bayan-jargalan 県	城址	南門址, 東西 回廊	瓦磚類	同上	モンゴル科学院 歴史学考古学研究所, 国立歴史博物館	国立中央博物館 2017
2016 ~ 2017	チヘルティン・ゾー Chihertiin Zoo	Tuv道 Bayan-chgaan県	墳墓	4号墳, 9号墓, 199号墓, 200号墓, 201号墳, 229号墓	土器, 馬具類, 馬車, 骨製弓付屬 など	大韓民國 共同聯合 調査團 (中央文化財 研究院など)	モンゴル科学院 考古学研究所	国立中央博物館 2020
2019~現在	フレート・ドブ Khureet Dov	ウランバルト Baga nuur区	城址	建物址, 回廊	瓦磚類	同上	モンゴル科学院 考古学研究所	오재진-안재필 2020 (報告書未發刊)

### ① ドールリグ・ナルス(Duurlig Nars)遺跡 (国立中央博物館 2011; 2014; 2021)

ドールリグ・ナルス遺跡は、ヘンティー県(Khentii aimag)バヤン-アドラガ郡(Bayan-Adraga soum)の郡庁舎の南側に広がる松林の中に構築された匈奴時代の大規模墓地である。約280基余りの墓が確認され、そのうち80基余りが墓道を備えた基壇墓として把握される。現在までに発見された匈奴の大型古墳群の中で最も東側に位置している

この遺跡は、1974年にD.ツェヴェーンドルジ(D.Tseveendorj)によって初めて発見され、1991年に日・蒙連合学術プロジェクトチームによって近隣のボル-ボラギーン・アム(Bor-bulagiin am)遺跡とともに調査された。2006年から韓国国立中央博物館が、5基の墓と17基の陪葬墓を調査した。副葬品として大型土器や灯蓋、青銅製車馬具類、鉄器、漢系遺物(玉璧、銅鏡など)など出土した。この遺跡の年代は、漢鏡の編年と絶対年代測定結果を総合して紀元後1世紀頃と推定されている。

この年代を史料と比較すると、当該遺跡は北匈奴の分裂・衰退期に築造されたものと把握される。北匈奴社会でドールリグ・ナルス築造に関わった構成員の地位と役割がどのようなものであったか、モンゴル東部の世界にいた鮮卑、烏桓、夫余とはどのような交流があったのかという問題の解決策を提供することができると期待される。

### ② ゴア・ドヴ(Gua Dov)遺跡 (国立中央博物館2017)

ゴア・ドヴ遺跡は、トゥヴ県バヤン-ジャルガラン郡(Bayan-Jargalan aimag)のヘルレン(Kherlen)川の右岸に沿って北から南に並ぶ土城の一つで、規模は200×180mである。ゴア・ドヴ20~40kmの間隔を置いてテレルジン・ドゥルヴルジン(Tereljün Durvuljin)土城、ブルフ(Burkh)土城、ホスティン・ボラグ(Khustyn Bulag)生産遺跡、フレート・ドヴ土城(Khureet Dov)、ウンドゥル・ドヴ(Undur Dov)土城、ゴア・ドヴ土城の順に位置している。

韓国の国立中央博物館は、2012年に遺跡一帯で地表調査を行い、2013年から2016年まで南門地と東西一帯の回廊を発掘した。その結果、瓦葺回廊と2階建ての瓦葺大門、苑池と推定される遺構などが確認され、門と回廊から多量の埴を回収した。埴が一定の間隔で散らばって発見されたため、道路遺構かと疑われたが、最終的に大門と回廊などの建築物が小規模な火災で倒壊したと結果と報告された。屋根は全体的に平瓦で覆われ、丸瓦は部分的に使用された。また、軒平瓦は匈奴の典型的な波浪文が施文され、軒丸瓦は圈雲文、羊角文、変形雲文の3種類が確認されており、漢代の雲文と類似しながらも異なる特徴を見せる。

これまでヘルレン川沿い一帯の匈奴土城は、1952年のKh.ペルレー(Kh.Perlee)の調査及び研究で祭祀遺跡(寺院地)と推定されていた。しかし、ゴア・ドヴ土城の発掘結果により、祭祀史跡としての根拠が不十分であるという指摘が提起された。瓦建物の存在は、高官大爵が居住する宮殿や建物を想起させるため、単于の夏宮殿であったと考える研究もある(Eregzen 2020)。過去10年間の匈奴土城の調査成果が蓄積されることで、匈奴土城の構造と用途及び性格の解明が、さらに明らかになることが期待される。

### ③ チヘルティーン・ゾー(Chihertiin Zoo)遺跡 (中央文化財研究所2020)

チヘルティーン・ゾー遺跡は、トゥヴ県・バヤン-チャガーン県(Bayan-Chagaan soum)に位置している。環状墓が数十基ずつ群集し、300基以上が築造された大規模な墓地である。直径10~20mの比較的中・大型級の環状墓が少なからず分布している。2016年から2017年にかけて、韓国の共同連合調査隊(中央文化財研究院、東西文物研究院、大韓文化財研究院、馬韓文化財研究院、忠北大、ソウル大など)とモンゴル科学アカデミー考古学研究所が、6基の墓を発掘した。

チヘルティーン・ゾー遺跡は、絶対年代や馬車の構造などから、紀元前3~2世紀、遅くとも紀元前1世紀頃に築造されたと推定される。これは、モンゴル・ジャバイカルで発見された匈奴時代の大規模墓の中でも早い時期に該当する。似た時期に、アルハンガイ県(Arkhangai aimag)ウギーノール郡(Ugii Nuur soum)のタミル・オラーン・ホショー(Tamiryn Ulaan Khushuu)遺跡も調査され、環状墓でも中・大型級の墓に最上級の遺物が埋葬され、年代もより早いことが明らかになった。これに

より、墓の平面形態(円形、方形)とサイズによって下層民(一般民)と上層民(貴族墓)に区分していた既存の研究に問題があることが明らかになった。

#### ④ フレート・ドヴ(Khureet Dov)遺跡

フレート・ドヴ土城はウランバートル市バガノール(Baga Nuur)区に位置する。ヘルレン川に沿って配置された匈奴時代の土城の中間地点に築造され、北にはホスティン・ボラグ生産遺跡、南にはウンドゥル・ドヴ土城が位置する。この城の規模は420m×420mで、周辺の城(200~300m)の中で最も大きい。土城内部には中央建物地と推定苑池が発見され、城外には北と西に付属建物址が多数分布している。韓国共同連合調査隊とモンゴル科学アカデミー考古学研究所が2019年から発掘調査を開始し、中心建物址1棟の発掘調査と、外部付属建物址1棟、回廊などを試掘調査し、新型コロナの影響で中断されたが、2023年に発掘調査が再開された。報告書は未刊行である。

### (2) 韓国における匈奴考古学の研究史

韓国の考古学界における匈奴への関心は、90年代後半~2000年代初頭、国立中央博物館のモンゴル地域調査と連携した展示及び学術大会の開催から始まった。発掘報告書の発刊とともに「モンゴル匈奴墓資料集成」(2008)などの学術資料集の出版、『モンゴル遺跡調査5年』(2002)、『ドールリグ・ナルス匈奴墓』(2009)、『草原の大帝国、匈奴』(2013)などの特別展の開催、『草原の大帝国』(2007、2008)といった学術会議の開催により、学界に匈奴研究の基礎資料を提供した。

韓国の考古学界における匈奴に対する認識は、李鍾宣(1989)の研究にみつけることができるが、それまで匈奴は中国北方で紀元前後漢時代に活動した遊牧民族という認識に過ぎなかった。本格的な紹介は2003年に姜仁旭が発表した「考古学から見た匈奴」で、初めて発表された匈奴研究論文といえる。姜仁旭は匈奴の考古学と文化全般を紹介しつつ、文献資料と考古資料の相違点を指摘した。エレクトェンのソウル大学博士号論文『モンゴルの匈奴墓研究』(2009)の発表と、シベリア草原考古学を専門とする姜仁旭が組織した『匈奴とその東の隣人たち』(2010)、『東アジア古代文化の中の匈奴』(2012)、『考古学で見た匈奴と韓半島』(2014)などの学術大会の開催で学界に、議論を形成した。2011年にモンゴルで開催された匈奴研究100周年記念の韓国語増補版『匈奴』(2017)を始め、『匈奴考古学概論』(2018)、『匈奴、帝国の美術』(2020)の相次ぐ出版は、研究の裾野を広げ、論文が増加するようになった。

最近、『ユーラシア古代ネットワーク匈奴と漢』(2021)などの学術会議を通じて、再び匈奴に注目が集まっている。韓国考古学界では、初期鉄器~原三国時代の遺物から見られる草原遊牧系要素を「北方系」または「北方式」と呼んでいたが、「遊牧文化」や「匈奴」、「鮮卑」などの比較的に具体的な集団名を挙げ、これらを直間接的な影響として解釈する傾向がみられるようになった。北方文化に対する理解が深まった結果と評価できるが、持続的な関心で実態に対する具体的な検討と綿密な研究が求められる。

こうしたなか、慶熙大の韓国古代史・考古学研究所では、2022年からモンゴル・ウランバートル大が調査中のゴル・モド-2(Gol Mod-2)匈奴貴族古墳群に対する共同研究を進めている。ゴル・モド-2は500基余りの墓が密集した超大型墓地として注目されているが、韓国学界にはまだあまり知らぬゴル・モド。特に車馬具などが副葬されており、楽浪との比較研究にも役立つと期待される。慶熙大調査隊は報告書に未収録の遺物の調査と現地地のドローン調査、科学的分析などを重点的に進めており、その中間成果は『古墳と車馬具から見た匈奴と伽耶の比較研究』(2022)を通じて紹介している。今度の冬にDNA調査を追加実施し、その結果を総合して2024年下半年頃に総合報告書『アルハンガイの匈奴』を発刊する計画である。

## 2. 匈奴の帯飾板の研究

### (1) 研究史

匈奴の帯金具の研究は主に動物紋帯飾板に集中している。1950~70年代の発掘調査初期には動物

紋帯飾板を単にスキタイ後期文化の延長線上と認識した。しかし、1970～80年代にはロシア、モンゴル、中国などでの発掘調査が活発になり、帯飾板の出土量も増加し、次第に匈奴文化の特徴的な遺物として把握されるようになった。動物紋帯飾板の平面形態、図象、文様、製作技法などの要素が検討され、分類の基礎が築かれた（Артамонов 1973; Дэвлет 1980; Wu En 1983）。さらに、ザバイカルのデレストゥイ (Derestui)、隴山地域の倒墩子 (Daodunzi) 遺跡の発掘は、動物紋帯飾板を匈奴時代の独自の芸術性を持つ標識遺物として理解する決定的なきっかけとなった (Davidova and Minyaev 1988, 1993; Minyaev 1995)。また、膨大な量の個人収集品の紹介 (Bunker et al. 1997, 2002) は、オルドス (Ordos) 地域の初期鉄器期から匈奴時代の帯飾板を含む青銅器研究の活性化に一役買った。2000年以降は、匈奴出土品に限定せず、研究の時空間的範囲が広がり、通時的な流れが重視された結果、古代から中世までの遊牧社会の腰帯文化の検討 (Dovjanskii 1990)、匈奴と鮮卑の関係 (潘玲 2010, 2012; 刘汉兴 2011)、鮮卑の帯飾板への影響 (大谷育恵 2010, 2013)、東西ユーラシア交流の指標としての帯飾板 (Brosseder 2011)、東北地方への影響 (Han and Kang 2023) などの研究が発表された。

## (2) 匈奴の帯飾板の出土状況 (図1) と製作の特徴

匈奴の考古学的痕跡は主にモンゴル、中国北部、ロシアのブリヤート、トゥヴァ、ハカスで確認される。帯飾板は墓からの出土が主体であるが、城址や住居地からも出土する。発掘で報告された腰帯の資料は、素材を問わず、帯環と装飾を含めて約300点程度が把握される。ただし、現在までに発見された匈奴の墓が13000基以上あり、毎年その数が増加するのに対し、調査の進捗度は非常に低いため、未発掘の墓からの出土する可能性や、過去に海外に持ち出された数百点以上の収集品資料を含めると、1000点以上になると推定される。

匈奴帯飾板の製作には、金、青銅、鉄などの金属材料だけでなく、黒玉 (jet)、粘板岩、鹿角および動物の骨、木などの非金属材料も使用されたことが確認されている。一つの腰帯には同じ素材で統一し、帯環と装飾がセットになる傾向が強い。青銅と玉石類で製作されたものに関しては、同型の帯飾板が複数存在するのが特徴といえる。金と青銅製の帯飾板は動物、人物などの図案を表現しているが、動物紋の場合には匈奴以前の時期からも出土しており、その点も注目される。

## (3) 匈奴式動物紋帯飾板の展開 (韓眞聖 2015)

匈奴遺跡から出土した動物紋帯飾板の平面形態には長方形、半楕円形、P字型がある。そして、周縁の文様の変化に着目するとI～V型式に分類される。初期には縁の文様がなかったり、水滴の形で刻印されていたが、時間の経過とともに点線に変わったり、文様が退化する現象がはっきりと観察される (図3)。様式的属性に基づくと、匈奴遺跡から出土した型式は、紀元前6～4世紀のスキタイ後期文化に直接的な系譜を求めることができる (図2)。匈奴時代に積極的に採用され、独自のスタイルで再生産され、大きく流行したことがわかる。匈奴が興隆する頃、紀元前4世紀のシベリア、アルタイ、中国新疆を結ぶ草原地域には、動物様式をモチーフにした遺物が最上位級の古墳の副葬品として埋葬されていた。甘肅省馬家塬遺跡、燕下都 辛莊頭30号墓の金製動物紋様腰紐や金製装身具など、サカ文化の東方への広がりや、紀元前3世紀末の阿魯柴登遺跡、西溝畔2号墓のような初期の匈奴墓でもみられる。紀元前2世紀頃、匈奴が漠北に追いやられた後、動物紋帯飾板は文様が退化し、簡素化の過程を経る。このような形式の変化と同時に、動物様式の帯金具が副葬された墓の規模も土器1点、刀子1点、宝貝など、薄葬に近い一般的な小型墓に拡大している現象が確認される。

## (4) 西岔溝出土の帯飾板から見た匈奴文化の波及

中国遼寧省西風県西岔溝遺跡は紀元前2～1世紀の300～500基の墓が密集した墓地で、1950年代に発見されて以来、匈奴、鮮卑、烏桓、中原など様々な文化が混在した様相のため、築造集団の性格解明に多くの論争があった。発見当初、本遺跡は匈奴の遺跡と報告されたが、それは青銅製の長方形の動物紋帯飾板を根拠としている (孫守道 1960)。

西岔溝遺跡から出土した帯飾板33点のうち、動物紋は17点である。出土遺構は正式に発掘されたM35号を除きほとんどが盗掘被害の大きい整理坑区域から出土した (辽宁省博物館等 2020)。出土状

況が報告されたM35号と一部の整理坑の内容を総合すると、①墓の中央に1～2点が副葬され、②鉄剣(Z49、Z119)または銅柄鉄剣(Z115、Z118、Z121)を伴うという特徴を示す(図4)。

西岔溝遺跡出土の帯飾板は、匈奴遺跡出土品と同型のものであると理解される。そこで本稿では、匈奴の帯飾板の分類(韓眞聖2015)を参考に型式分類し、匈奴遺跡及び西岔溝遺跡出土品をA～C類型に設定して時空的展開様相を確認した。Aタイプは匈奴帯飾板の成立期を示す。B類型は匈奴帯飾板の発展期で、地域間の交流の様相を知ることができ、最も広い地域に分布している。その中でも西岔溝M35号出土品は、匈奴のものと文様的に違いを持ちながら、銅環とセットで出土するという共通性を示す。C類型は匈奴帯飾板の拡散及び衰退期で、ザバイカルからモンゴル草原と、内モンゴルから中国北部地域間の交流の様相をよく示している(図6)。

西岔溝遺跡では、匈奴遺跡で確認されるすべての型式の動物紋帯飾板が、一つの遺跡から出土している点が非常に興味深い。西岔溝では、スキト-シベリア文化から発展した動物様式を匈奴が受け入れ、再量産した過程を示す様々な型式だけでなく、中国北部一帯で流行した地域様式も出土している。匈奴の墓は盗掘されたものが一般的なもので、このような状況を考慮しても、一つの遺跡ですべての型式が発見される事例は珍しい。出土量の多いデレストゥイ、倒墩子遺跡以外は、通常1～2型式しか確認されず、1～2点ずつ出土するのが一般的である。

一方、西岔溝遺跡では、帯飾板を除き、匈奴と共通する遺物があまりみられないことも注目される。このような点は、持ち運びが容易な佩式を匈奴の表象として腰巻きとして採用し、「匈奴のアイデンティティ」をもつ匈奴系の住民であることを自認した匈奴化(xionguification)の表現であると推察される。もちろん、民族の特性、製品の特徴、様々な地域での分布など解決すべき点は多々あるが、西岔溝ではこの地域の先住民を中心に、匈奴を自称する自分たちのアイデンティティを帯飾板で表したという解釈が可能である。

#### (5) 夫余のアイデンティティを把握するカギとなる西岔溝

先に西岔溝遺跡のアイデンティティについて述べたが、本遺跡の事例は、特定の遺物だけでは集団の出自そのものは規定できないことも端的に示している。西岔溝遺跡で発掘された匈奴の帯飾板は、特定の地域から来たものではなく、様々な地域から輸入されてきたものである。また、帯飾板を除いた他の遺物では、匈奴との直接的な関係を示すものはほとんどない。したがって、匈奴式帯飾板を佩用した西岔溝の墓の主人公は、実際の匈奴系ではなく、西岔溝社会の中で匈奴系の先民意識を標榜する象徴物としての役割をしたとみることができる。さらに、西岔溝で出土した銅柄鉄剣は匈奴では発見されないものであるが、夫余の子孫を自称した初期百濟の遺跡が清州五松から出土している(윤정하・강인욱2021)。これらの状況を総合すると、西岔溝出土の匈奴式帯飾板だけで彼らを特定の一つの集団として規定するのは正しくない。むしろ、多様な文化が共存していた遼寧省東部から吉林省西部一帯で、匈奴と夫余が勃興したダイナミックな時期に、多様な文化の共存を通じて成長した土着勢力という点が強調されるべきである。ただし、西岔溝以降に登場する榆樹老河深では、匈奴式帯飾板が完全に消失することから、この地域では、匈奴の消滅とともに徐々に夫余内の遊牧的性格の強い集団に編入されたと想定することができる。

#### まとめ

韓国は過去20年以上にわたり匈奴考古学研究の一員として積極的な発掘調査と研究に参加している。韓国の考古学における「匈奴」に対する関心は、古代文化の起源と原流の探求として始まったが、古朝鮮、夫余、原三国時代の様々な遺跡に見られる北方文化要素を楽浪、匈奴、鮮卑の特定の文化で具体化し、その実体を規定し解明するようになった。韓国の考古学において匈奴の物質文化に対する理解は、韓国を含む東アジア古代文化の流れを理解する上で重要な要素として位置づけられている。中国東北部に存在した古朝鮮、夫余の研究も活発化するにつれ、それらが隣接している重要性が認識されてきたが、単に比較、参考資料としてのみ認識するのではなく、東アジア世界の

一員として、より積極的かつ具体的な説明が必要といえるだろう。

## 参考文献

- 강인욱, 2003, 「고고학으로 본 匈奴의 발생과 분포」, 『文化財』 36: 105-156.
- 국립중앙박물관 2001 『몽골 모린 틀고이 흉노무덤』
- 국립중앙박물관 2003 『몽골 호드긴 틀고이 흉노무덤』
- 국립중앙박물관 2011 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤(I)』
- 국립중앙박물관 2014 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤(II)』
- 국립중앙박물관 2017 『몽골 고아도브 흉노 유적』
- 국립중앙박물관 2021 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤 III -160 호분 배장묘-』
- 오재진·안재필 2020 「후레트 도브 흉노 도성지 발굴조사」 『2020 아시아의 고고학』
- 윤정하·강인욱 2021 「청주 오송 유적 출토 부여계 동병철검의 의의」 『한국상고사학보』 112: 31-54.
- 이종선, 1989 「오르도스후기금속문화와한국의철기문화」, 『한국상고사학보』 4 호.
- 중앙문화재연구원 2020 『몽골의 무덤』 진인진.
- 중앙문화재연구원 편 2018 『흉노고고학 개론』 진인진.
- 한진성 2015 「흉노 동물문교구 연구」 경희대학교 석사학위논문.
- 한진성 2020 「흉노를 통해 본 고대 유라시아초원 유목사회의 허리띠 문화」 『흉노, 제국의 미술』  
국립문화재연구원: 380-397.
- G.에렉젠, 양시은 2017 『흉노』 진인진.
- 大谷育恵, 2011, 「三燕金属製装身具の研究」, 『金沢大学考古学紀要』 32: 87-105.
- \_\_\_\_\_, 2013, 「飛馬文帯再考」, 『金沢大学考古学紀要』 34: 11-19.
- 潘玲, 2010, 「论矩形透彫阶梯纹青铜牌饰」, 『考古』 第7期: 69-72.
- 刘汉兴, 2011, 「匈奴、鲜卑牌饰的初步研究」, 郑州大学硕士学位论文.
- 庞昊, 1998, 「翁牛特旗发现两汉铜牌饰」, 『文物』 第1期: 42-43, 78.
- 孙守道, 1960, 「匈奴西岔沟文化古墓群的发现」, 『文物』 第8,9期 合刊.: 25-36.
- 乌恩, 1981, 「我国北方古代动物纹饰」, 『考古学报』 第1期: 45-61.
- \_\_\_\_\_, 1983, 「中国北方青铜带饰」, 『考古学报』 第1期: 25-37.
- 辽宁省博物馆 等, 2020a, 『西丰西岔沟-西汉时期东北民族墓地 (上)』, 文物出版社.
- Brosseder, Ursula. 2011. Belt plaques as an indicator of East-West relations in the eurasiatic steppe at the turn of the millennia, *Xiongnu Archaeology*: 349-424.
- Артамонов, М. И. 1973. Сокровища саков (Artamnov 1973)
- Давыдова, А. В. and Миняев, С. С. 1987. Пояс с бронзовыми бляшками из Дырестуйского могильника, *Археологические исследования на Алтае: 184-187. (Davydova and Minyaev 1993)*
- \_\_\_\_\_. 1993. Новые находки наборных поясов Дырестуйском могильнике, *Археологические вести* 2: 55-65. (Davydova and Minyaev 1993)
- Добжанский, В. Н. 1990. Наборные пояса кочевников Азии (Dovjanskii 1990)
- Дэвлет, М. А. 1980. Сибирские поясные ажурные пластины: II в. до н.э.-I в. н.э, Изд-во. (Devlet 1980)
- Хан Чжин Сон, Кан Ин Ук. 2023 Этнокультурная принадлежность могильника Сичагоу по материалам поясных блях культуры хунну, *Вестник НГУ. Серия: История, филология*. 22(5): 79-94. (Han and Kang 2023)



# 帶飾板과 匈奴

한진성 (경희대학교)

## 시작하며

본 발표는 고대 동아시아 세계에서 한 축을 담당했던 ‘흉노’에 관한 한국 조사단의 고고학 조사 및 한국 고고학계에서의 연구 동향을 소개한다. 고고학 조사는 1999 년 이후 최신 자료를 포함하며, 연구는 기왕의 연구사와 함께 발표자의 대식관 연구를 살펴보고자 한다.

## 1. 한국에서의 흉노 고고학 조사 및 연구 현황

### (1) 한국 조사단의 몽골 지역 흉노 유적 조사 현황

한국 조사단의 몽골지역 고고학 조사는 1992 년 한몽학술조사연구협회에 의해 처음 시작되었으며, 약 5 년 간 몽골의 선사유적에 대한 현황파악 및 지표조사를 중심으로 진행하였고 북타미르강 일대 흉노시대 분묘군을 발견했다. 이러한 사전조사를 발판으로 1999 년 국립중앙박물관은 투브 아이막 몽근모리트 숲에서 호스틴 볼락에서 처음으로 흉노 유적을 발굴하기 시작하였으며, 흉노 토기가마와 기와가마를 조사되었다. 2000 년에는 모린 툴고이 유적에서 고리형(원형) 흉노 무덤 1 기와, 2001 년에는 호드긴 툴고이 유적에서 원형무덤 4 기가 조사되었다. 2006 년부터 도르릭 나르스 분묘군에서 대형의 ‘凸’자형(‘甲’자형) 무덤과 배장묘 등의 발굴이 시작되어 현재까지 이어오고 있다. 2010 년대 이후 몽골에서 흉노 도시유적으로 관심이 옮겨가는 분위기에 맞춰 2013 년부터 2016 년까지 고야도브 성지를 조사했다(국립중앙 박물관 2017). 2016 년부터는 중앙문화재연구원이 조직하고 여러 조사법인과 대학이 참여한 대한민국 공동연합조사단이 치헤르틴 저 무덤 유적과 후레트 도브 성지를 조사하며 지금에 이르렀다.

표 1. 한국의 몽골 지역 흉노 유적 발굴 목록

조사연도	유적명	소재지	성격	조사유구	주요 출토 유물	조사담당기관		출전
						한국측	몽골측	
1999	호스틴 볼락 Khustyn Bulag	투브 아이막, 알 탄볼락 숲	생산 유적	토기가마, 기와가 마	토기편, 원형토제품, 점토덩어리, 와전류 편	국립중앙박물관	몽골국립역사박물관, 몽골과학아카데미 역사연구소	국립중앙박물관 2001
2000	모린 툴고이 Morin tolgoi	투브 아이막, 알 탄볼락 숲	무덤	방형 1기	동경, 뼈깃가락, 토 기, 白樺樹皮 加工品	"	"	"
2001	호드긴 툴고이 Khudgiin tolgoi	아르한가이 아이 막, 바트첵겔 숲	무덤	원형 4기 (1~4호 묘)	토기, 등잔, 마탁, 철 촉, 골궁미	"	몽골국립역사박물관, 몽골과학아카데미 고고학연구소	국립중앙박물관 2003
2006 ~현재	2006 ~200 o Duurlig Nars	헨티 아이막, 바 양아드라가 숲	무덤	철자형 3기(1, 3, 5호분), 원형 1기 (3호), 방형 1기(4 호)	토기,(호, 등잔) 철 기, 동북, 동경, 마구, 마차	"	몽골국립박물관, 몽 골과학아카데미 고 고학연구소	국립중앙박물관 2011
	2010 ~201 1			철자형 1기(T1호 묘), 배장묘 10기 (E1~3호, W1~6 호, S1~1호)	토기(호), 관장식, 동북, 철북, 구슬류, 마구, 마차부속, 옥 벽	"	몽골국립박물관, 몽골과학아카데미 고고학연구소	국립중앙박물관 2014
	2017 ~201 9			160호분의 배장 묘 6기 (E1~E4 호, W1~W2호), 슬래그 분포 구역	토기, 철제마구류, 활 부속구 등	"	몽골과학아카데미 역사학고고학연구 소, 몽골국립박물관	국립중앙박물관 2021
2013 ~2016	고야도브 Gua Dov	투브 아이막, 바얀자르갈란 숲	성지	납문지, 동서 회랑	와전류	"	몽골과학아카데미 역사학고고학연구 소, 몽골국립박물관	국립중앙박물관 2017
2016 ~2017	치헤르틴 저 Chikhertyn Zoo	투브 아이막, 알 탄볼락 숲	무덤	4호분, 9호묘, 199호묘, 200호 묘, 201호분, 229	토기, 마구류, 마차, 구슬류, 활부속구	대한민국 공동연 합조사단 (중앙문 화재연구원 이하)	몽골과학아카데미 고고학연구소	중앙문화재연구원 2020
2019~	후레트 도브 Khureet Dov	울란바토르시, 바가노르구	성지	건물지, 회랑	와전류	"	몽골과학아카데미 고고학연구소	오재진·안재필 2020 (보고서 미발 간)

### ① 도르릭 나르스(Duurlig Nars) 유적(국립중앙박물관 2011; 2014; 2021)

도르릭 나르스 유적은 헨티 아이막 바양아드라가 슝 청사 남쪽에 넓게 형성된 소나무 숲 속에 조성된 흉노시기 대규모 공동묘지다. 약 280 여기 무덤이 확인되며 그 중 80 여기가 묘도를 갖춘 ‘凸’자형 (또는 ‘甲’자형) 무덤으로 파악된다. 현재까지 발견된 흉노의 대형 고분군 중 가장 동쪽에 위치한다.

이 유적은 1974 년 D.체벤도르지에 의해 처음 발견되었고, 1991 년 일본-몽골 연합 학술프로젝트팀에 의해 인근의 보르블라긴 암 유적과 함께 조사된 바 있다. 2006 년부터 한국 국립중앙박물관이 5 기의 무덤과 17 기의 배장묘를 조사하였다. 부장품으로 대형토기와 등잔, 청동제 차마구류, 철기, 한식 유물 (옥벽, 동경 등) 등이 출토되었다. 이 유적의 연대는 한식동경의 교차편년과 절대연대측정 결과를 종합하여 기원후 1 세기 무렵으로 추정된다.

이 연대를 사서와 비교해 볼 때, 해당 유적은 북흉노 분열·쇠퇴기에 축조된 것으로 파악된다. 북흉노 사회에서 도르릭 나르스 축조에 참여한 구성원들의 지위와 역할이 어떠하였고, 몽골 동쪽의 세계-선비·오환·부여-와는 어떤 교류를 하였는지에 대한 문제의 해결 방안을 제공할 수 있을 것으로 기대한다.

### ② 고아도브(Gua Dov) 유적(국립중앙박물관 2017)

고아도브 유적은 투브 아이막 바얀자르갈란 슝 헤를렌 강 우안을 따라 북에서 남으로 늘어선 도시유적 중 하나로, 이 유적의 규모는 200×180m 이다. 북에서 남으로 20~40km 간격을 두고 테렐진 두르불진 성, 부르흐 두르불진 성지, 호스틴 불락 생산유적, 후레트 도브성, 운두르 도브성, 고아도브 성 순으로 위치하고 있다.

한국 국립중앙박물관은 2012 년 유적 일대에서 지표조사를 하고, 2013 년부터 2016 년까지 남문지와 동·서쪽 일대 회랑을 발굴하였다. 그 결과 기와를 얹은 회랑과 2 층 구조의 기와를 얹은 대문, 추정 연못지 등이 확인되었으며, 문지와 회랑에서 다량의 와전을 수습하였다. 특히 와전류가 일정한 간격으로 흩어져 발견되어 도로 유구로 의심되었으나, 최종적으로 대문과 회랑 등의 건축물이 소규모 화재로 무너진 것으로 보고되었다. 지붕은 전체적으로 암키와를 덮고, 수키와는 부분적으로 사용하였다. 또한 암키와는 흉노의 전형적인 파상문이 시되었으며, 수키와는 권운문, 양각문, 변형운문 3 종이 확인되어 한대 (漢代)의 운문 (雲文) 유사하면서도 다른 특징을 보인다.

그동안 헤를렌 강변 일대의 흉노성은 1952 년 페를레의 조사 및 연구로 제사유적(사원지)으로 추정되고 있었다. 하지만 고아도브 성 발굴을 통해 제사유적으로서의 근거가 불충분하다는 지적이 제기되면서, 기와 건물의 존재는 고관대작들이 사는 궁정이나 건물지로서 선우의 여름궁정일 것으로 보는 견해가 제시되었다 (에렉젠 2020). 지난 10 년 간의 흉노성 조사 성과가 상당수 축적됨으로써 흉노성의 그 구조와 용도 및 성격 규명이 더욱 밝혀질 것으로 기대한다.

### ③ 치헤르틴 저(Chihertyn Zoo) 유적(중앙문화재연구원 2020)

치헤르틴 저 유적은 투브 아이막 바얀차간 슝에 위치한다. 원형 무덤이 수 십기씩 군집을 이루어 300 기 이상이 축조된 대규모 공동묘지이다. 직경 10~20m 의 비교적 중대형급 원형 무덤이 적지 않게 분포한다. 해당 유적은 2016 년부터 2017 년까지 한국의 공동연합조사단 (중앙문화재연구원, 동서문물연구원, 대한문화재연구원, 마한문화재연구원, 충북대학교, 서울대학교 등)과 몽골과학아카데미 역사고고학연구소가 무덤 6 기를 발굴하였다.

치헤르틴 저 유적은 절대연대와 마차의 구조 등을 통해 기원전 3~2 세기, 늦어도 기원전 1 세기 무렵 축조된 것으로 추정된다. 이는 몽골·자바이칼에서 발견된 흉노시기 대형급 무덤 중에서도 이른시기에 해당한다. 비슷한 시기에 아르한가이 아이막 오기노르 슝의 타미린 올란 호쇼(Tamiryn Ulaan Khoshuu) 유적도 조사되면서, 원형 무덤에서도 중대형급 무덤에 최상급 유물이 부장되고 연대도 더 이르다고 밝혀졌다. 이를 통해 흉노 무덤의 평면형태(원형,방형)와 크기에 따라 하층민(일반민)과 상층민(귀족무덤)으로 구분되던 기존 연구 문제가 있음을



입증하게 되었다.

#### ④ 후레트 도브(Khureet Dov) 유적

후레트 도브 성지는 울란바토르시 바가노르구에 소재한다. 헤틀렌 강을 따라 조성된 흉노시기 도시유적의 가장 중간지점에 건설되었는데, 북으로는 호스틴 볼락 생산유적, 남으로는 후레트 도브 성지가 위치한다. 이 성의 규모는 420m×420m 로 주변의 성들(200~300m) 중에서 가장 큰 것으로 확인된다. 성 내부에는 중앙건물지와 추정 연못지가 발견되었고, 성 외부에는 북쪽과 서쪽에 부속 건물지가 다수 분포하고 있다. 한국 공동연합조사단과 몽골 과학아카데미고고학연구소가 2019 년부터 발굴조사를 시작하여 중심건물지 1 동에 대한 발굴조사와 외부 부속 건물지 1 동, 회랑 등을 시굴조사가 되었고, 코로나 19 로 중단되었다가 2023 년 발굴이 재개되었다. 보고서는 미발간되었다.

#### (2) 연구 현황

한국 고고학계에서 흉노에 대한 관심은 90 년대 후반~2000 년대 초 국립중앙박물관의 몽골 지역 조사와 연계 전시 및 학술대회 개최로부터 시작되었다. 발굴보고서 발간과 더불어 『몽골 흉노무덤 자료집성』(2008)과 같은 학술자료집의 출판, 『몽골 유적조사 5 년』(2002), 『도르릭나르스 흉노무덤』(2009), 『초원의 대제국 흉노』(2013)와 같은 특별전시 개최, 『초원의 대제국』(2007, 2008) 학술회의 개최 등은 학계에 흉노 연구의 기초자료를 제공했다.

한국 고고학계에서 흉노에 대한 인식은 이종선(1989)의 연구에서부터 찾을 수 있는데, 이 때까지만 흉노는 중국 북방에서 기원전후한 시기에 활동했던 유목민족이라는 인식에 불과했다. 본격적인 소개는 2003 년 강인욱이 발표한 「고고학으로 본 흉노」에서라 처음 발표된 흉노 연구 논문이라할 수 있는데, 흉노 고고학 문화 전반에 대한 소개와 더불어 문헌과 고고학 자료의 간극을 지적하고, 에릭센의 서울대 박사학위논문 「몽골 흉노 무덤 연구」(2009) 흉노 발표와 시베리아 초원 고고학 전공 강인욱 교수가 조직한 『흉노와 그 동쪽의 이웃들』(2010), 『동아시아 고대문화 속의 흉노』(2012), 『고고학으로 본 흉노와 한반도』(2014)와 같은 학술대회 개최로 학계에 담론을 형성했다. 2011 년 몽골에서 개최된 흉노 연구 100 주년 도록의 한국어 증보판 『흉노』(2017)를 비롯하여 『흉노 고고학개론』(2018), 『흉노, 제국의 미술』(2020)의 연이은 출판은 연구의 저변이 확대되어 논문 출판이 증가했다.

최근 『유라시아 고대 네트워크 匈奴와 漢』(2021) 등의 학술회의를 통해 다시금 흉노에 대한 연구의 관심이 환기되고 있다. 한국 고고학계에서는 초기철기~원삼국시대의 유물에서 보이는 초원 유목문화적 요소를 ‘북방계’ 또는 ‘북방식’ 이라고 부르던 것에서 ‘유목문화’ 나 ‘흉노’, ‘선비’ 등의 구체적인 집단명을 거론하며 이들의 직간접적 영향으로 해석하는 경향이 보인다. 이는 북방 문화에 대한 이해가 높아진 것은 고무적이라 평가할 수 있지만, 지속적인 관심으로 실상에 대한 구체적인 검토와 면밀한 연구가 요구된다.

경희대학교 한국고대사·고고학연구소에서는 2022 년부터 몽골 울란바타르대학이 조사 중인 골 모드-2 흉노 대형무덤군에 대한 공동연구를 진행하고 있다. 골 모드-2 는 500 여 기의 분묘가 밀집된 초대형 공동묘지로 주목받았지만, 한국 고고학계에는 아직 크게 알려지지 않았다. 차마구 등을 부장하고 있어 낙랑과의 비교연구에도 유용할 것으로 기대된다. 경희대 조사단은 울란바타르대가 보고서에 미처 수록하지 못한 미보고 유물과 현장 드론조사, 과학적분석 등을 중점적으로 추진하였으며, 『고분과 차마구를 통하여 본 흉노와 가야의 비교연구』(2022)를 통해 중간성격을 소개한 바 있다. 2023 년 12 월 DNA 조사를 추가로 실시하여 그 결과를 종합해 2024 년 하반기에 종합보고서 『아르한가이의 흉노(가제)』를 발간할 계획이다.

## 2. 흉노 대식판 연구 (한진성 2015; 2020; Han and Kang 2023)

### (1) 연구 현황

흉노 허리띠 연구는 동물문 대식판에 집중되어 있다. 1950~70 년대 발굴조사 초창기에는

동물양식 대식판을 단순히 스키타이 후기 문화의 연장선으로 인식한 반면, 1970~80 년대에는 러시아, 몽골, 중국 등지에서 발굴조사가 활발해짐으로 인해 대식판의 출토 수량도 증가하면서 점차 흉노 문화의 특징적인 유물로 파악하게 되었다. 동물문대식판의 평면형태, 도상, 문양, 제작기법 등의 요소가 살펴지며 분류의 토대가 마련되었다(Artamonov 1973; Devlet 1980; 乌恩 1981, 1983). 게다가 자바이칼의 데레스투이(Derestui), 도둔자 유적의 발굴은 동물문대식판을 흉노 시기의 독자적 예술성을 가진 표지유물로 이해하는데 결정적인 계기가 되었다(Davidova and Minyaev 1987, 1993; Minyaev 1995). 아울러 방대한 수량의 개인수집품 소개(Bunker et al. 1997, 2002)는 오르도스 지역의 초기철기~흉노시기 대식판을 포함한 청동기 연구의 활성화에 일조하였다. 이후 2000 년부터는 흉노 출토품에만 국한하지 않고, 연구의 시공간적 범위를 확장해 통시적 흐름을 살피는 추세로서, 고대~중세 유목사회 허리띠문화 검토(Dovjanskii 1990), 匈奴와 鮮卑의 관계(潘玲 2010, 2012; 刘汉兴 2011), 鮮卑대식판으로의 영향(大谷育惠 2011, 2013), 동-서 유라시아 교류의 지표로서 대식판(Brosseder 2011), 동북으로의 영향(Han and Kang 2023) 등의 연구가 발표되었다.

## (2) 흉노 대식판의 출토 현황(도 1)과 제작 특징

흉노의 고고학적 자취는 주로 몽골, 중국 북부, 러시아 부랴트·투바·하카스에서 확인되며, 대식판은 대체로 소재한 무덤 유적에서 대다수 발견되며, 적은 수로 성지와 주거지에서 출토한다. 고고학 발굴로 보고된 허리띠 자료는 소재를 불문하고 띠고리와 장식을 포함해 약 300 점 정도가 파악된다. 다만 현재까지 발견된 흉노 무덤이 약 1 만 3 천기 이상이며 매년 그 숫자는 증가하고 있는데 반해, 조사는 진척도는 매우 낮기때문에 미발굴 무덤에서 출토 가능성 및 해외로 반출된 수 백 점 이상의 수집품 자료를 포함한다면 1 천 점 이상은 될 것으로 추정된다.

흉노 대식판의 제작에는 금, 청동, 철과 같은 금속재료뿐만 아니라 흑옥(黑玉, jet), 점판암제 석재(石材), 사슴뿔과 동물의 뼈, 나무 등 비금속재료를 모두 사용한 것으로 확인된다. 하나의 허리띠에는 동일한 소재로 통일하여 띠고리와 장식이 세트를 이루는 경향이 우세하다. 청동과 옥석류로 제작된 경우 동형의 대식판이 상당수 출토되고 있는 것이 특징이다. 특히 금과 청동제 대식판은 동물, 인물 등의 도안을 표현하고 있는데, 동물문의 경우 흉노 전 시기에 걸쳐 두루 출토되고 있어 주목된다.

## (3) 흉노 동물문 대식판의 전개

흉노 유적에서 출토된 동물문대식판의 평면형태 장방형, 반타원형, P 자형이 있으며, 양식변화를 살펴보면, 특히 가장자리 테두리 문양의 변화에 주목하면 I-V 형식으로 분류된다. 초기에는 테두리 문양이 없거나 물방울 형태로 음각되어 있다가, 시간이 흐름에 따라 점선으로 바뀌거나 문양이 퇴화하는 현상이 뚜렷이 관찰된다(도 3).

양식적 속성에 근거하여 흉노 유적에서 출토된 동물양식 허리띠고리와 동일한 형식은 기원전 6~4 세기 스키타이 후기 문화에서부터 직접적 계보를 찾을 수 있으며(도 2), 흉노 때 적극 채용되면서 자신들만의 스타일로 재생산되고, 크게 유행한 것으로 파악된다. 흉노가 발흥할 무렵 기원전 4 세기의 시베리아-알타이-신장 중국을 잇는 초원지역에는 동물양식을 모티프로 한 유물들이 최상위급의 고분의 부장품으로 매납되고 있었다. 감속성 마가원 유적, 연하도 신장두 30 호묘 금제 동물문양 허리띠고리 및 금제 장신구 등 사카 문화의 동방확산은 기원전 3 세기 말 아로시등 유적, 서구반 2 호묘 같은 초기 흉노 무덤에서도 발견된다. 기원전 2 세기 무렵 흉노가 막북으로 밀려난 이후 동물문 대식판은 문양이 퇴화하고 단순화 과정을 거친다. 이 같은 형식의 변화와 동시에 동물양식 허리띠고리가 부장된 무덤의 규모도 토기 1 점, 도자 1 점, 자패 등 박장에 가까운 일반 소형 무덤으로 확대되고 있는 현상이 확인된다

## (4) 서차구 출토 대식판을 통해 본 흉노 문화의 파급

중국 요령성 서풍현 서차구 유적은 기원전 2~1 세기 300~500 기 무덤이 밀집된 공동묘지로,

1950년대 발견이후 흉노, 선비, 오환, 중원 등 여러 문화가 혼재된 양상으로 축조집단의 성격규명에 많은 논란이 있어왔다. 발견 초기 해당 유적은 흉노 유적으로 보고되었는데, 청동계 장방형 동물문대식판을 근거로 든다(孫守道 1960).

서차구 유적에서 출토된 대식판 33 점 중 동물문은 17 점이다. 출토 유구는 정식 발굴된 M35 호를 제외하고 대부분 도굴피해가 큰 정리갱 구역에서 출토되었다(辽宁省博物馆等 2020). 출토 현황이 보고된 M35 호와 일부 정리갱의 내용을 종합하면 ①무덤의 중앙에서 1~2 점씩 부장되며, ②철검(Z49, Z119) 또는 동병철검(Z115, Z118, Z121)을 공반하는 특징을 보인다(도 4).

서차구 유적 출토 대식판은 흉노유적 출토품과 동형의 것들로 이해되기 때문에, 흉노 동물문대식판의 분류(한진성 2015)를 참고하여 형식분류하고, 흉노 유적 및 서차구 유적 출토품을 A~C 유형으로 설정하여 시공적 전개양상이 살펴진다. A 유형은 흉노 패식의 성립을 보여준다. B 유형은 흉노 패식의 발전으로, 지역 간 교류 양상을 알 수 있으며, 가장 넓은 지역에 분포한다. 그 중 서차구 M35 호 출토품은 흉노의 것과 문양적으로 차이를 가지면서도 청동 환(고리)과 세트를 이루어 출토되는 공통성을 보인다. C 유형은 흉노 패식의 확산 및 쇠퇴기으로 자바이칼-몽골 초원과 내몽골~중국 북방 지역 간 교류 양상을 잘 보여주고 있다(도 6).

서차구 유적에서는 흉노 유적에서 확인되는 모든 형식의 동물문대식판이 한 유적에서 출토되고 있다는 점이 매우 흥미로운 부분이다. 서차구 동물문 허리띠 패식은 스키토-시베리아 문화에서 발전한 동물양식을 흉노식으로 수용하고 재양산한 과정을 보여주는 여러 형식들 뿐만 아니라, 중국 북방 일대에서 유행한 지역양식도 출토되고 있다. 흉노 무덤이 도굴피해를 입은 경우가 일반적이라 이러한 상황을 감안하더라도 한 개 유적에서 모든 형식이 발견되는 사례는 드물다. 출토량이 많은 데레스투이, 도둔자 유적의 경우 외에는 보통 1~2 개의 형식만 확인되고, 1~2 점씩 출토되는 것이 일반적이다.

한편 서차구 유적에서는 대식판을 제외하고 흉노와 공통적인 유물부장은 크게 드러나지 않는 것도 주목된다. 이러한 점은 후대가 용이한 패식을 흉노 표상으로서 허리띠로 채용하고, 스스로 ‘흉노의 아이덴티티’를 부여한 흉노 계통의 주민임을 자처한 흉노화(xiongufication)의 표현이라 추론된다. 물론 민족의 특성, 제품의 특징, 다양한 지역의 분포 등은 그들을 한정시켜 살펴보는 데 한계가 있지만, 서차구는 이 지역의 토착민들 중심으로 흉노를 자처하는 자신들의 정체성을 허리띠로 대변한 것으로 이해될 수 있을 것이다.

##### (5) 부여의 정체성을 파악하는 관건으로서의 서차구

서차구 유적의 사례는 특정 유물만으로 집단의 성격을 규정지을 수 없음을 극명하게 보여준다. 특히 서차구에서 발견된 흉노계 허리띠의 예로 보듯이 서차구에서 발굴된 흉노의 허리띠는 특정한 지역에서 온 것이 아니라 여러 지역에서 수입되어 온 것이다. 또한, 허리띠를 제외한 다른 유물들에서는 흉노와 직접적인 관계를 보여주는 것은 거의 없다. 따라서 흉노의 허리띠를 패용한 서차구 무덤의 주인공은 실제 흉노계통이 아니라 서차구 사회 안에서 흉노계통의 선민의식을 표방하는 상징물로서 역할을 했다고 볼 수 있다. 나아가서 서차구에서 출토된 동병철검은 흉노에서는 발견되는 것이 아니며 부여의 후손을 자처한 초기 백제의 유적이 청주 오송에서도 발견되었다(윤정하 강인욱 2021). 이러한 상황을 종합하면 서차구 출토의 흉노계 허리띠만으로 이들을 특정한 하나의 집단으로 규정하는 것은 옳지 않다. 오히려 다양한 문화가 공존했던 요령성 동부~길림성 서부 일대에서 흉노와 부여가 발흥하던 力動的 시기의 다양한 문화의 공존을 통해서 성장했던 토착 세력의 성장이라는 점이 강조되어야 한다. 다만, 서차구 이후에 등장하는 유수 노하심에서는 흉노계 허리띠가 완전히 사라지는 바, 이 지역은 흉노의 소멸과 함께 점차 부여 내의 유목성격이 강한 집단으로 편입된 것으로 상정할 수 있다.

## 마치며

한국은 지난 20년 이상의 흉노 고고학 연구 일원으로 적극적인 발굴 조사와 연구에 동참하고 있다. 한국 고고학에서 ‘흉노’에 대한 관심은 고대 문화의 기원과 원류 탐구로서 시작하여 고조선-부여 문화, 원삼국시대 여러 유적에서 보이는 북방문화 요소를 낙랑, 흉노, 선비 등으로 구체화하고 그 실체를 규정하고, 해명하려는 시도는 고무적이라 할 수 있겠다. 한국 고고학에서 흉노 고고학 문화에 대한 이해는 한국을 포함한 동아시아 고대 문화 흐름을 이해하는데 핵심 요소로 자리매김하고 있는 추세다. 중국 동북에 존재했던 고조선·부여 연구도 활발해짐에 따라 인접한 중요성을 인식하고 있지만 비단 비교·참고 자료로서만 인식할 것이 아니라 동아시아 세계의 일원으로서 보다 적극적이고 구체적인 해명 필요할 것이다.

## 참고문헌

- 강인욱, 2003, 「고고학으로 본 匈奴의 발생과 분포」, 『文化財』 36: 105-156.
- 국립중앙박물관 2001 『몽골 모린 톨고이 흉노무덤』
- 국립중앙박물관 2003 『몽골 호드긴 톨고이 흉노무덤』
- 국립중앙박물관 2011 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤(I)』
- 국립중앙박물관 2014 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤(II)』
- 국립중앙박물관 2017 『몽골 고아도브 흉노 유적』
- 국립중앙박물관 2021 『몽골 도르릭 나르스 흉노무덤 III -160 호분 매장묘-』
- 오재진·안재필 2020 「후레트 도브 흉노 도성지 발굴조사」 『2020 아시아의 고고학』
- 윤정하·강인욱 2021 「청주 오송 유적 출토 부여계 동병철검의 의의」 『한국상고사학보』 112: 31-54.
- 이종선, 1989 「오르도스후기금속문화와한국의철기문화」, 『한국상고사학보』 4 호.
- 중앙문화재연구원 2020 『몽골의 무덤』 진인진.
- 중앙문화재연구원 편 2018 『흉노고고학 개론』 진인진.
- 한진성 2015 「흉노 동물문교구 연구」 경희대학교 석사학위논문.
- 한진성 2020 「흉노를 통해 본 고대 유라시아초원 유목사회의 허리띠 문화」 『흉노, 제국의 미술』 국립문화재연구원: 380-397.
- G.에렉젠, 양시은 2017 『흉노』 진인진.
- 大谷育恵, 2011, 「三燕金属製装身具の研究」, 『金沢大学考古学紀要』 32: 87-105.
- \_\_\_\_\_, 2013, 「飛馬文帯再考」, 『金沢大学考古学紀要』 34: 11-19.
- 潘玲, 2010, 「论矩形透彫阶梯纹青铜牌饰」, 『考古』 第7期: 69-72.
- 刘汉兴, 2011, 「匈奴、鲜卑牌饰的初步研究」, 郑州大学硕士学位论文.
- 庞昊, 1998, 「翁牛特旗发现两汉铜牌饰」, 『文物』 第1期: 42-43, 78.
- 孙守道, 1960, 「匈奴西岔沟文化古墓群的发现」, 『文物』 第8,9期 合刊.: 25-36.
- 乌恩, 1981, 「我国北方古代动物纹饰」, 『考古学报』 第1期: 45-61.
- \_\_\_\_\_, 1983, 「中国北方青铜带饰」, 『考古学报』 第1期: 25-37.
- 辽宁省博物馆 等, 2020a, 『西丰西岔沟-西汉时期东北民族墓地 (上)』, 文物出版社.
- Brosseder, Ursula. 2011. Belt plaques as an indicator of East-West relations in the eurasian steppe at the turn of the millennia, *Xiongnu Archaeology*: 349-424.
- Артамонов, М. И. 1973. Сокровища саков (Artamnov 1973)
- Давыдова, А. В. and Миняев, С. С. 1987. Пояс с бронзовыми бляшками из Дырестуйского могильника, *Археологические исследования на Алтае: 184-187. (Davydova and Minyaev 1993)*
- \_\_\_\_\_. 1993. Новые находки наборных поясов Дырестуйском могильнике, *Археологические вести* 2: 55-65. (Davydova and Minyaev 1993)
- Добжанский, В. Н. 1990. Наборные пояса кочевников Азии(Dovjanskii 1990)

Дэвлет, М. А. 1980. Сибирские поясные ажурные пластины: II в. до н.э.-I в. н.э., Изд-во. (Devlet 1980)

Хан Чжин Сон, Кан Ин Ук. 2023. Этнокультурная принадлежность могильника Сичагоу по материалам поясных блях культуры хунну, Вестник НГУ. Серия: История, филология. 22(5): 79–94. (Han and Kang 2023)



图 1 匈奴の帶飾板の出土遺跡

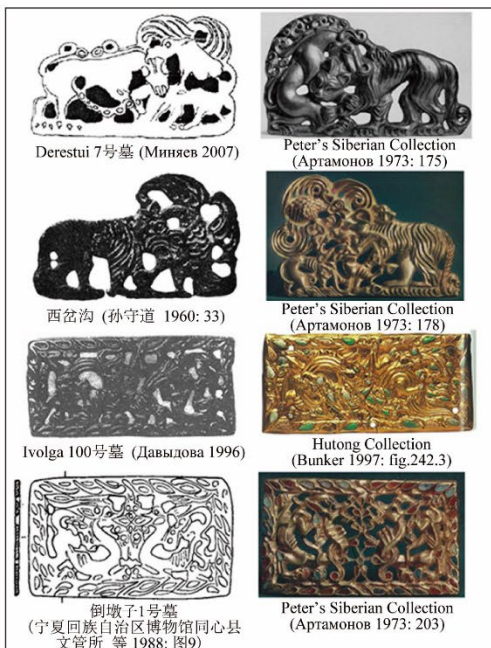


图 2 I-II 型式：同一图案金製・青銅製遺物 (한진성 2015: 图 24)



图 3 匈奴の動物帶文裝飾板の変遷（文様の退化） (한진성 2015: 图 24)



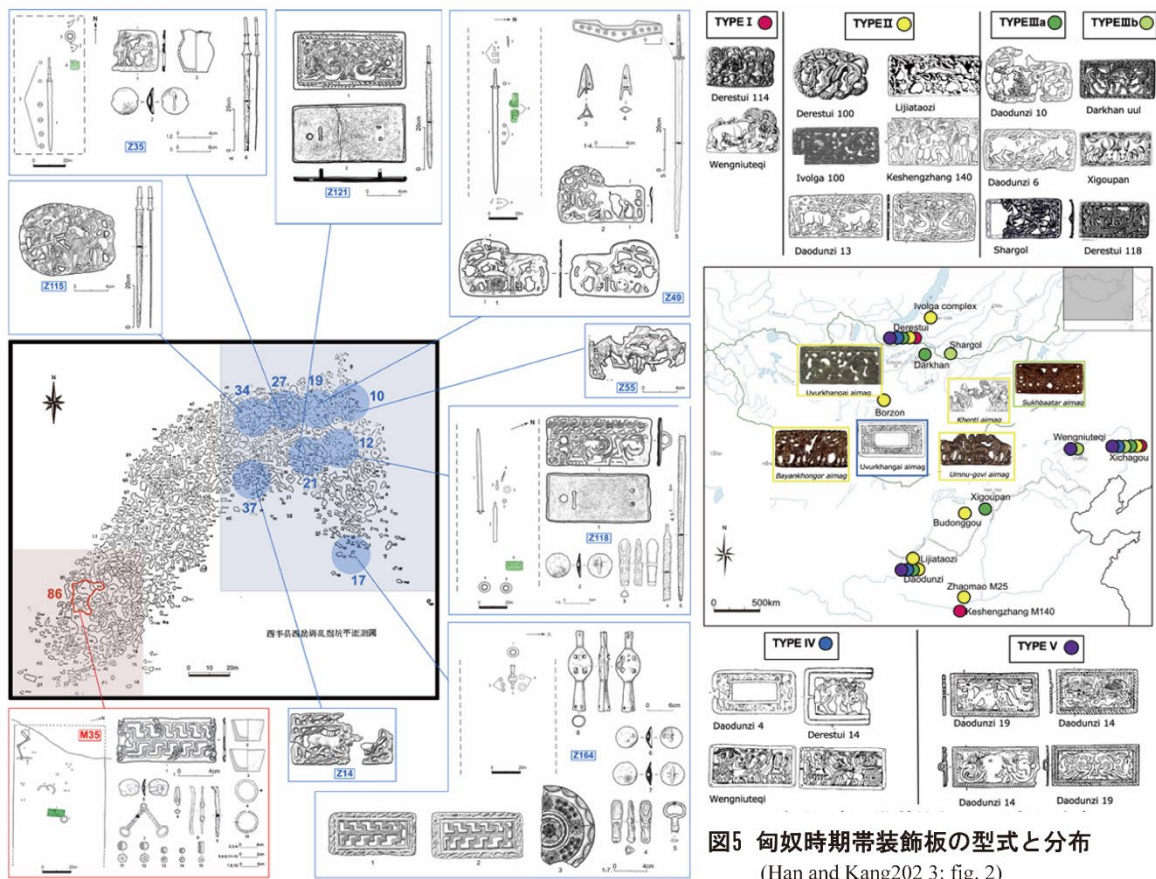


图5 匈奴时期带装饰板的型式与分布 (Han and Kang 2023: fig. 2)

图4 西岔沟遗迹的匈奴带装饰板的分布 (Han and Kang 2023: fig.1)

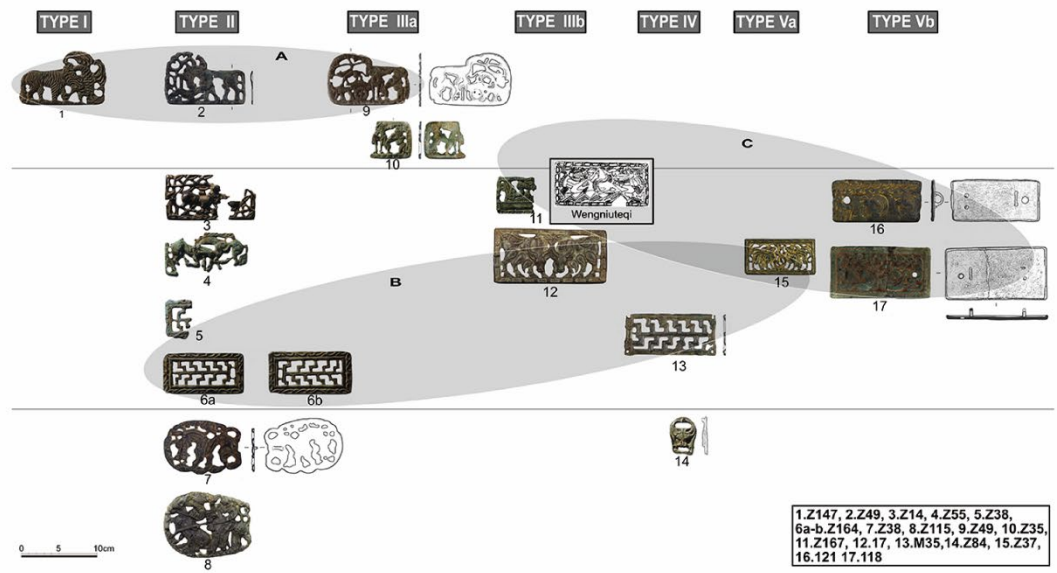


图6 西岔沟遗迹出土动物文带装饰板的型式与类型 (辽宁省博物馆等2020a; 庞昊1998より作成)